岡豪風土

〈高知県立歴史民俗資料館だより・おこうふうじつ〉 第86号 2014年6月30日

国分寺の板絵両界光明真言曼荼羅（金剛界）と廃仏毀釈

岡本 桂典

本年は、四国霊場開創一二〇〇年とされ、四国八十八ヶ所霊場では納経をされるお遍路さんを多く見かけます。

四国八十八ヶ所霊場の道は、いつも何事もなかったようにお遍路さんを迎えてくれています。この道も平穏な道でなかった時期があります。明治時代の初年に、政府の神道国教化政策による仏教の排斥や破壊運動が起こり、仏堂や仏像、無声の説法者ともいえる仏具などの破壊や撤去などが行なわれました。所謂、廃仏毀釈（排仏毀釈とも書きます）です。土佐も例外ではありませんでした。それは、人間の信仰心にも深い影響を与えてしまいました。

さて、高知市の北東部に一宮という地名があります。ここには、志那祢さまとして知られている土佐神社があります。かつての土佐一宮です。その東に小道を隔てて四国霊場第30番札所百々山東明院善楽寺があります。江戸時代の『南路志』には「高賀茂大明社…○別当善楽寺　神宮寺」とみえています。明治の初年に二寺とも廃寺となりましたが、善楽寺のみ再興されました。この両寺に存在していた仏像や仏具などの一部は、南国市の国分寺や室戸市の最御崎寺などに納められています。国分寺の本堂の外陣壁面には径2・155mの室町時代と推定される板絵両界光明真言曼荼羅（胎蔵界）と写真の「文化十四年（1817）」の紀年銘をもつ径2・715mの板絵両界光明真言曼荼羅板絵（金剛界）があります。大日如来の廻りには光明真言を配しています。板絵の裏には、「本尊金剛界大日如来：」、「金色　光明大曼荼羅」、「南無四国八十八ヶ所惣霊場為奉灌請當國」、「南無四國八十八ヶ所霊場當國一ノ宮奉納金色光明真言」などとあります。もとは土佐神社に懸けられていたもので、廃仏毀釈により撤去され、国分寺で守られてきたものです。

板絵両界光明真言曼荼羅（金剛界）　四国霊場第29番札所　国分寺蔵

企画展

マンダラ ―チベット・ネパールの仏たち―によせて

平成26年6月28日（土）～7月31日（木）

主催：高知県立歴史民俗資料館、国立民族学博物館、一般財団法人千里文化財団

曽我 満子

高知県立歴史民俗資料館では、夏期企画展として「マンダラ―チベット・ネパールの仏たち―」を開催します。

この展示は、今夏、高知県立美術館を会場に開催する、四国霊場開創1200年記念「空海の足音　四国へんろ展」高知編（会期：8月23日（土）～9月23日（祝・火））のプレ企画展として開催するものです。

マンダラは、インドで生まれ、ネパール・チベット・中国を経て、9世紀の初頭、唐に渡り、密教を学んだ空海によって、正式に日本にもたらされました。日本におけるマンダラの歴史はここから始まります。それでは、日本に入ってくる以前のマンダラとはどのようなものであったのでしょうか？

本展示では、チベット・ネパールのマンダラを国立民族学博物館の全面協力により紹介します。各地で創造され、展開していったマンダラを展示します。マンダラの表現する根源的意味を考えていただければ、と思います。

密教について

マンダラと密教は切っても切り離せない関係にあります。まずは密教について少し触れておきたいと思います。

密教は、4、5世紀に大乗仏教の新しいかたちとしてインドで生まれました。密教ではシンボルとヨーガ（観想）を重視します。シンボルの意味を表現するために儀礼も重んじます。

悟りをひらくために、密教ではことばや論理のみでは不十分だと考えました。各人の感覚器官をフル活用して自己と神、仏、宇宙（世界）といった超越的な存在を直接把握し、それらと一体化することを目指します。そのため、密教は体得的・神秘的であるといわれます。

マンダラの意味

マンダラときいて、イメージするものは人それぞれかと思いますが、一般に日本で知られるマンダラといえば、「金剛界曼荼羅」、「胎蔵曼荼羅」など絵画のマンダラが代表的なものとしてあげられるでしょう。多数の仏が描かれた仏画をイメージすることはできますが、マンダラとはいったい、何を示す言葉なのでしょうか？

ヒントはマンダラのふるさと、インドにあります。マンダラとは、サンスクリット（梵語・古代インドの言語）の音写です。サンスクリットではマンダは「中心あるいは、心髄」を意味し、ラは所有をあらわします。マンダラは「悟りを有する場、聖なる空間」を意味します。

密教の特徴と合わせて考えると、マンダラは本来の目的である悟りを得るためのシンボルの装置であり、儀礼をおこなう際の道具ともいえます。

次に、仏教の発展とともに密教とマンダラがどのような軌跡をたどってきたのか、少し紐解いてみたいと思います。

仏教の発展と派生する仏たち

紀元前5世紀頃、ブッダが悟りをひらいてその教えを人々に伝え、仏教がおこりました。1世紀以降、大乗仏教がさかんになるとともに、ブッダがもっているとされる数多くの働きや能力を分け持つ、さまざまな仏がインドで生まれました。また、ブッダが人間の姿で表されるようになり、仏像がつくられるようになりました。5、6世紀以降、インドで仏教の一派として密教がさかんになると、さらに数多くの仏たちが信仰されるようになりました。それはギリシアの神々の相関関係の組織になぞらえて「仏教パンテオン」とも呼ばれています。

マンダラの仏

マンダラは密教が台頭するなかで、重要な役目を担うようになりました。マンダラには多くの仏たちが表現されています。

次に「仏教パンテオン」においてグルーピングされた仏たちを順に見ていきましょう。

第1のグループは仏、如来です。如来と名前が付く釈迦如来や薬師如来が日本ではよく知られていますが、五仏と呼ばれる大日如来、阿閦如来、宝生如来、阿弥陀如来、不空成就如来が密教でもっとも重要な仏とされ、金剛界マンダラの中心に位置しています。写真の五仏はとてもよく似た姿で表されていますが、それぞれ決まった位置

宝生如来像
大日如来の南に位置する

大日如来像
金剛界マンダラの中心に位置する

阿弥陀如来像
大日如来の西に位置する

阿閦如来像
大日如来の東に位置する

五仏像　ネパール　国立民族学博物館蔵

不空成就如来像
大日如来の北に位置する

にいます。また、手をよく見ると違う印を結んでいます。

五仏の他に日本では見られない、ヘールカという仏もいます。怖い外見をしていて、妃を抱いた姿で表されます。チベットやネパールで人気のある仏たちです。

第2のグループは、菩薩（如来になるために修行中の仏）です。この世の中にとどまって、迷ったり、苦しんだりしている人びとを導こうとします。生きとし生けるものを救う、とされています。

第3のグループは、女神です。チベット・ネパールでは女神はポピュラーな存在です。柔和な女神もいれば、魔女的な女神もいます。ブッダは悪魔が使わした美しい女性の誘惑に打ち勝って悟りを得たとされています。仏教では元来、異性との接触はタブーとされてきました。しかし、日本以外の密教では血、骨、皮など「不浄なもの」、「隠しておくべきもの」の要素が悟りを得るための手段として積極的に取り入れられるようになり、髑髏や妃とともに表された仏のマンダラはよく見られます。

第4のグループは、護法神です。男神たちで、仏教の教えを護るため、教えに従わない者たちを恐ろしい姿で威嚇しながら導く役割を担っています。

第5のグループは、ヒンドゥー教に起源をもつ神々で、方位を護る神や星神です。マンダラの空間を護るようにマンダラの一番外側に位置しています。

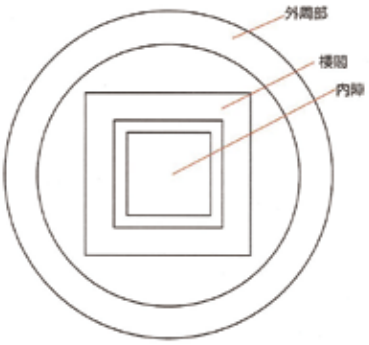
マンダラの構造

マンダラは円、正方形などの幾何学的な形から構成されています。円や直線で区画された中に仏たちの姿が整然と描かれています。ネパールのマンダラを例に3つに分けて見てみましょう。

1　外周部（一番外の円の部分　内側が聖なる空間であるという結界。）

2　楼閣（次の正方形　仏たちの住む宮殿。宮殿は須弥山の頂上に建てられていると考えられた。）

3　内陣（楼閣の内部にある仏たちを描いた部分。）



マンダラを構成する3つの部分

以上、マンダラ展をご覧いただく際

五護陀羅尼（ごごだらに）マンダラ　ネパール　国立民族学博物館蔵

陀羅尼とは除災や招福などのために唱えられる呪術的な言葉。このマンダラでは陀羅尼が神格化され、女神の姿をとる。

の鑑賞のポイントについて、説明いたしました。展示は、次のとおり2部構成となっております。

1　仏教のパンテオン

マンダラに住する多様な仏を前述のとおり、大きく5グループに分けて紹介します。

2　仏たちの住む宮殿

ネパール・チベット・日本の絵画・立体マンダラを紹介します。

宝マンダラ　ネパール　国立民族学博物館蔵

マンダラは容易に理解できるものではないかもしれませんが、展示をご覧になって、宇宙の縮図であり、同時に自己の心の図でもあるといわれるマンダラとは何かを考えるきっかけとしていただければ、と思います。自己の内なる世界と自己をとりまく宇宙を一体化して捉える考え方があるということを知り、自己を見つめ直す機会としていただければ、新たな世界観が芽生えるかもしれません。

最近の収蔵資料から

捕鯨図下絵

中村 淳子

昨年、古書市場に現れたのは、鯨のような大物、土佐の捕鯨資料でした。当館の資料収集委員会の承認を得て、高知県文化財団がこれを購入しました。「捕鯨図下絵」と「鯨鯢十種畧圖」の2部構成の資料で、前半の「捕鯨図下絵」は安政2年（1855）、土佐の鯨組、津呂組の奥宮氏が讃岐の金刀比羅宮に奉納した捕鯨絵馬と構図が似ており、その下絵と考えられています。安政癸丑と記されていますが、安政に癸丑はなく嘉永6年癸丑（1853）のようです。

同絵馬は、幕末から明治時代にかけて活躍した絵師、河田小龍が奥宮氏から依頼されて描いた捕鯨図です。室戸に招かれて捕鯨の様子を見聞し、写生したという小龍がダイナミックに描いています。その下絵とされる本資料には「この鯨の姿いま少し見せたる方よろし」などのメモがあり、より良い表現を求める絵師の心がしのばれます。同じく下絵とされていますが、本資料より完成度の高い『津呂組奥宮捕鯨絵図』（室戸市教育委員会蔵）を経て、同絵馬へと昇華していったのでしょう。

生の情報が豊かなのは、下絵ならでは。本資料の勢子船や銛など道具の図解からも土佐捕鯨の特徴がみえてきます。

後半部の、「鯨鯢十種畧圖」には、ザトウクジラやセミクジラなど10種の鯨が描かれ、その後に土佐の捕鯨の始まりなど、明治20年（1887）の小龍の記述があります。

『捕鯨図下絵』部分

最近の収蔵資料から

甲冑の着方を知らない武士への指南書『単騎要略』

大黒 恵理

突然ですが、甲冑ってどのようにして着用するのでしょうか？意外とパーツが多くて…一体どれから身に着けたら良いのだろう？当館では子ども向けの体験学習として甲冑を着るメニューもありますが、最初は皆とまどってしまいます。現在では戦国武将を取り上げたイベントなどで甲冑姿の人を目にする機会も増えましたが、実はすでに江戸時代には武士ですら着用法を知らない人が大勢いたのです。それは泰平の世の中になり、甲冑を着用する機会がなくなったから。

でも武士たるもの、甲冑も着られないようでは…ということで出版されたのが甲冑の故実や着用法について記した指南書。写真はその一つである『単騎要略』という書の挿し絵です。先日当館に寄贈された資料群の中に入っていました。下着・足袋から臑当・籠手、そして甲冑をつけるところまで絵入りで紹介されています。残念ながら全5巻のうち第2巻しかありませんでしたが、両刀を差し、喉輪・鉢巻・面頬をつけて兜をかぶる所作がよく分かります。

戦国時代の人々も、このようにして戦の準備をしたことでしょう。10月11日から始まる特別展「長宗我部氏と宇喜多氏―天下人に翻弄された戦国大名―」でも多数の甲冑・武具を展示します。中には高知初公開となるものも！実際に誰かが身に着けていたことを想像しながら鑑賞してみてはいかがでしょうか。

兜をかぶる

面頬をつける

鉢巻をする

喉輪をつける

刀を差す

考古　埼玉県朝霞市・県指定文化財　不動曼荼羅板碑

鎌倉時代から室町時代にかけて、造立された石造塔婆の一つに板碑（板石塔婆）があります。この板碑は、供養塔、逆修塔として造立されもので、一観面を原則としています。

東国の武蔵国では、約二万基以上の緑泥変岩製の板碑が造立されました。四国にも同じ緑泥変岩を用いたものが、徳島県に分布しており阿波型板碑と呼ばれています。これら板碑の中に曼荼羅を彫出したものがありますが、その数は多くありません。埼玉県朝霞市根岸台八丁目、金子家にある板碑の中に有名な不動曼荼羅板碑（高さ156㎝、幅37㎝、厚4.5㎝）があります。板碑には「三弁宝珠／弥陀一尊種子」「不動曼荼羅」を刻し、その下に左記のように彫出しています。正安三年（1301）に造塔されたもので、同一板碑がもう一基あり、対をなしていたものとされています。このような板碑の彫出には、専門僧が関わっていたと考えられます。（岡本）

「（梵字五輪塔）」
「正安三年辛丑月日」
「（梵字五輪塔）」

金子家板碑

不動曼荼羅板碑部分
（朝霞市根岸台金子家）
（『板碑の総合研究』1984年より）

歴史　武将イベント花盛り

大坂の陣から数えておよそ400年。各地で記念イベントが目白押しですが、特に主戦場となった地域での取り組みが目立ちます。今回縁あって大阪府八尾市のイベントを見学することができました。

慶長19年（1614）、京の宿所を密かに脱出した牢人長宗我部盛親は、豊臣方として大坂城に入城。大名家返り咲きをもくろみ、徳川方と戦いました。翌年の夏の陣では八尾方面に出撃。徳川勢の藤堂高虎隊と激突し、激しい戦闘となりました。この八尾市のイベントは、まさにこの時の戦いを取り上げたものです。

八尾市立歴史民俗資料館における企画展で専門知識を得たあと、古戦場跡を歩くフィールドワークに出発。さらに藤堂・長宗我部両軍に分かれての模擬行軍と腕相撲対決などで頭を弛緩させ、最後に常光寺位牌堂での寺宝特別観覧というバランスの良さ。歴史を学ぶだけでなく、楽しむことの大切さを教えていただいた気がします。（野本）

大坂夏の陣　甦る八尾の戦い　常光寺

民俗　高知市史　民俗編

3月に刊行された『高知市史　民俗編／地方都市の暮らしとしあわせ』が発刊以来市内の書店の売り上げベスト1を何週間も制覇し、ヒットしています。それもそのはず、明治時代の食生活、昭和初期の高知繁華街の様子、闇市とバラック、商店街の歴史など市民にとって興味深い内容が目白押しです。

市町村史の民俗編は、衣食住など分類別に民俗を記述するスタイルが普通ですが、本書では、ライフヒストリーという個人の人生史を中核に据えています。主婦の買い物や工場の町・旭の変化、引揚者の戦後など個人の視点から時代や暮らしが生き生きと描かれています。取り上げている時代はまさに読者と重なっており、その意味でも本書は今を生きる高知市民の「自画像」と言って良いでしょう。個々の人間に寄り添う民俗学の本領発揮と言うべきで、下手すればバラバラな印象になりかねない内容を一冊の書物にまとめあげた編者の高岡弘幸氏を中心とする執筆メンバーの力量はたいしたものです。

ただ、本書で取り上げられた内容が高知市の民俗や歴史のほんの一部であることもまた事実。本書をひとつの里程標として、さらに調査研究が進むことを期待しています。（梅野）

れきみんニュース

近現代コーナーの展示替え

平成26年9月1日～

当館歴史分野の収蔵品（近代）といえば、戦時中の軍関係資料が多数を占めます。そんななか、女学校時代の資料を中心とする山本昭子（旧姓秦泉寺）さんの資料は際立っています。山田高等女学校時代の教科書類や、習字・美術作品などから、当時の女子教育の有り様がうかがえるからです。また、兵庫県の工場に学徒動員された時の資料なども貴重です。ちょっと当時の寮の献立表を覗いてみましょう。三食とも、主食は米麦、漬物は大根菜、副食は大根を中心とした煮物か味噌汁となっています。育ち盛りの女学生のためでしょうか、昼食時には、ライスカレー・ハヤシライス・五目寿司などが出されることもあり、ごく希に、まんじゅう+コーヒーのサービスもあったようです。昭和20年にしては意外な気がしましたが、実は「材料が悪く、食中毒を起こす人もいました…」（山本さんの手記）というのが実態でした。近代コーナーでは、こういった山本さんの資料を中心に戦時下のコーナーを一新します。是非一度ご観覧ください。

（野本）

神々と精霊の物語

昨年に続いて、今年も5月24日（土）・25日（日）に、いざなぎ流と物部川流域の文化を考える会主催の「神々と精霊の物語―いざなぎ流祭文の世界―」が開催されました。初日は、山本ひろ子先生、小松和彦先生、斎藤英喜先生ら豪華メンバーによる講演会と保存会による湯神楽再現。2日目は御幣切り体験の後、影仙頭や塩ケ峯公士方神社などを巡りました。1日目は約110名、2日目は約50名が参加し、盛り上がりました。

（梅野）

中学生の職場体験

当館では、毎年、中学校職場体験の受入を行っております。本年度は、南国市立北陵中学校、高知市立潮江中学校、南国市立香長中学校の3校からお申し込みがありました。

4月23日・24日の2日間、北陵中学校3年生1名が当館にて、業務体験を行いました。当館学芸課は企画展「椿姫の里・三原」の直前準備中でしたので、中学生には、主に企画展のパネル準備作業などを手伝っていただきました。また、5月3日の「歴民の日」（開館記念日・入館無料）に実施のクイズ問題作成にも、意欲的に取り組みました。クイズを作成することにより、資料をより深く、興味をもって見ることができた、とのことです。クイズの一部は実際の問題に採用させていただきました。

（曽我）

高知県立埋蔵文化財センターと協同授業を初めて実施

当館に来館の学校団体体験学習指導を高知県立埋蔵文化財センター（以下、埋文センター）と連携して行いました。

「勾玉をつくろう」で5月1日に高知市立介良小学校、5月2日に高知市立朝倉小学校の2校が春の遠足で来館しました。体験学習の前に、多目的ホールにて埋文センター調査員による授業を行いました。画像を織り交ぜての内容は、各学校の周辺の遺跡についての簡単な紹介、続いて勾玉についての説明と作り方についてです。校区内の自分たちの生活圏内に古い時代の遺跡があると説明を受けた子どもたちは、遺跡・出土遺物、ひいては歴史について、身近に感じることができたようでした。

中庭に移動後は、蝋石を削り、紐通しの孔を開ける作業を埋文センター調査員、当館職員・カルチャーサポーターが一緒に指導しました。

今回の協同授業により、体験学習の材料・道具、団体対応方法などのノウハウについて共有することができました。今後も両施設の連携について試行を重ね、来館・利用者へのサービス向上につなげたい、と考えております。

（曽我）

コーナー展 深渕神社の芝居絵屏風

8月1日（金）～8月31日（日）

深渕神社（香南市野市町）より寄託された芝居絵屏風の公開も今回で３回目。今年は「仮名手本忠臣蔵」を題材にした２点を展示します。謡本とあわせて、“描かれた忠臣蔵”をお楽しみください。

仮名手本忠臣蔵（七段目）
香南市深渕神社蔵

予告 特別展 高知・岡山文化交流事業Ⅲ

長宗我部氏と宇喜多氏

10月11日（土）～12月7日（日）

信長・秀吉など、天下人に翻弄された地方の戦国大名２氏を同時に取りあげる特別展です。
ゆかりの画像や甲冑・刀剣類の他、古文書も充実させて、その盛衰を詳しくご紹介します。

高知・岡山文化交流事業Ⅰ・Ⅱ特別展

図録販売中

平成24年度 特別展
刀 武士の魂
ー備前の名刀と土佐ゆかりの刀剣ー

Ａ４版	114頁
価　格	1,000円
送　料	350円

平成25年度 特別展
備 前 焼
ー薪と炎が織りなす土の美ー

Ａ５版	104頁
価　格	1,000円
送　料	300円

岡豊風日（おこうふうじつ）　第86号
平成26年6月30日
編集・発行　（公財）高知県文化財団
高知県立歴史民俗資料館
〒783－0044　南国市岡豊町八幡1099－1
TEL　088（862）2211
FAX　088（862）2110
開館時間　午前9時～午後5時
休館日　年末年始12月27日～1月1日
臨時休館あり
観覧料　通常期（常設展）大人（18才以上）460円・団体（20人以上）360円
（特別展・企画展）常設展示込510円
団体（20人以上）410円
無料：高校生以下、高知県及び高知市長寿手帳所持者、療育手帳・身体障害者手帳・障害者手帳・戦傷病者手帳・被爆者健康手帳所持者とその介護者（1名）
印刷・川北印刷株式会社
http://www.kochi-bunkazaidan.or.jp/~rekimin/
Eメール：rekimin@kochi-bunkazaidan.or.jp

平成26年 6月～10月の催し

企画展 マンダラ

―― チベット・ネパールの仏たち ――

6月28日（土）～7月31日（木）

インドで生まれ、唐で密教を学んだ空海によって日本にもたらされたマンダラ。本展示では、国立民族学博物館の所蔵品からチベットやネパールのマンダラを展示します。

ブッダ・マンダラ
ネパール　国立民族学博物館蔵

講演会

●要予約・観覧料要
7月5日（土）14:00～16:00
「マンダラとは何か」
講師：立川 武蔵氏
（国立民族学博物館名誉教授）

展示室トーク

●申込不要・観覧料要（講師:担当学芸員）
7月19日（土）14:00～15:00

ワクワクワーク 琥珀（こはく）で勾玉（まがたま）を作ろう

8月30日（土）10:00～12:00
要予約（先着30名）、材料費要

常設展示へ資料追加展示（3階総合展示室）

土佐の藩窯 尾戸（おど）焼

承応２年（1653）に高知城北、尾戸で始まった尾戸焼の資料、「小尉（こじょう）　掛花入（かけはないれ）」「掛花入」の２点を総合展示室近世コーナーへ追加展示しました。

小尉　掛花入

空海の足音 四国へんろ展 高知編

県内札所の貴重な仏像や絵画を中心に、四国内外の空海ゆかりの宝物を一挙公開。
国宝・重要文化財を含む多彩な作品により、遍路文化をご紹介します。

会場：**高知県立美術館**
会期：**8月23日（土）～9月23日（火・祝）**
観覧料：大人1,200円（前売1,000円）
前売券販売所：高知県立歴史民俗資料館/高新プレイガイド/高知大丸プレイガイド/ローソンチケット（Lコード62700）他
企画・運営：高知県立歴史民俗資料館